

学 位 論 文 題 名

日本語アスペクトの研究

－テイルの意味解釈を中心に－

学位論文内容の要旨

第一章では、先行研究のうち、主要なものを取り上げ、要点と問題点を明らかにする。概略的に言えば、先行研究において「テイル」には「動作の進行・継続」、「結果状態」、「経験・記録」のような意味があることが指摘され、近年では「結果状態」、「経験・記録」のような用法に関して「パーフェクト」という名称が与えられる場合が多いことを述べる。また、これら複数存在する意味、用法を条件付ける要因として動詞の意味分類を重視する傾向が強いことを述べる。すなわち、「主体動作・客体変化」動詞に「テイル」が付くと「動作継続」、「主体変化動詞」に「テイル」が付くと「結果継続」、「主体動作動詞」に「テイル」が付くと「動作継続」の解釈を受ける、とされる。しかしながら、先行研究における「パーフェクト」という記述、及び動詞の意味分類は、「テイル」の意味、用法の解明に一定の貢献はあったものの、実際には各用法は連続的で区分が明瞭とは言えず、例外的事例も少なくないため、特に日本語教育の観点からは必ずしも利点ばかりではないことを指摘する。初学者にとっては複雑な動詞の意味分類を提示されたり、性質の異なる事例を「パーフェクト」という同一の名称で一括することは必ずしも得策とは言えず、その意味からも現時点において基本概念を再検討し、その利点と欠点とを明らかにする必要性を述べる。

第二章では、「経験・記録」と呼ばれる「テイル」の用法の側面について先行研究を吟味した上で、実際には一義的な決定ができない場合が少なくないことを具体的に指摘する。また、「完成性」だけでは「テイル」の経験・記録用法を規定できないことをふまえて、この用法が従来言われているよりも複雑な性質を持つ可能性を述べる。特に、経験・記録用法に属するとみなされる事例でありながら単に過去における出来事の生起を述べるだけでなく、その出来事の時間的内部構造にまで言及するような事例があることを指摘する。従って、「テイル」の用法は従来言われているよりもさらに複合的な内容を持つ可能性を明らかにする。

第三章では、主体動作・客体変化動詞に「テイル」が付加される事例について詳細に検討を行う。先行研究においては主語の結果状態と「テイル」との関係のみが注目されていたが、実例を詳細に検討することによって目的語（ヲ格）も「テイル」の意味解釈において大きな影響力を持つことを指摘する。この過程で「主体変化」（再帰的）動詞（「着る」のようなもの）と、「主体動作・客体変化」動詞（「殺す」、「破る」のようなもの）との中

間的な事例を発見し、新たに「準再帰動詞」と呼ぶことを提案する。すなわち、これまであまり注目されてこなかったが、たとえば、「塗る」、「飾る」のような動詞につく「テイル」は従来の見解によれば結果状態よりはむしろ動作継続あるいは経験・記録と解釈されるはずであるが、実際には結果状態と解釈することが可能な事例（「青く塗っている」、「部屋を飾っている」）が少なからず存在することを明らかにする。

第四章では「テイル」と数量詞との関連が分析される。数量詞が「テイル」の意味、用法の決定に果たす役割を分析し、動詞の意味分類のみならず、文脈的要因が深く関わることを示す。また数量詞による目的語の意味限定（外的な限界の設定）に連動してテイルの解釈が影響を受け、相対的に結果状態の解釈を取りやすくなることを示して（「木を倒している」、「木を六本倒している」）、やはり「ヲ格名詞句」（目的語）もテイルの解釈に深く関与していることを示す。

第五章では、先行研究においてしばしば「デ格」名詞句は動作パーフェクトと関連し、「ニ格」名詞句は「結果状態」と関連する、と言われて来たが、具体例を詳細に検討することによって、明らかに結果状態を意味する事例であるにもかかわらず「デ格」名詞句が現れていたり、逆に明らかに動作パーフェクト（経験・記録）を意味する事例と考えられるにもかかわらず「ニ格」名詞句が現れている、というような例外的な事例が少なからず存在し、「デ格」名詞句、「ニ格」名詞句は、従来言われていたのとは異なり、実際にはアスペクト解釈上の決定的な要因とは言えないことを示す。

第六章では、先行研究において「動作パーフェクト」の指標と考えられることが多かった「もう／既に」という形式を分析する。その結果、従来言われてきたこととは異なり、「もう／既に」が現れていても、明らかに結果状態の意味であったり、場合によっては動作の継続と考えられる事例が存在することを指摘し、「テイル」の解釈が一義的に動作パーフェクトと関連するとは言えないことを明らかにする。

第七章は、心理動詞「分かる」を特に取り上げ、「テイル」との関係进行考察する。その結果、先行研究において、しばしば「状态的」、あるいは「人称制限的」と言われて来た特徴は、「分かる」の用法の一部分しか説明できず、実例に照らすと、「分かる」は状态的な性質と、変化的な性質を両方併せ持つ、と規定するほうがよりよく実情を示すことを明らかにする。また、付随的な問題として、テイルがアスペクトに加えて、話者の心的態度（モダリティ）に関わる機能を示すような事実が存在することを指摘する。

第八章では、本論文の要約と、残された課題を述べる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 佐 藤 知 己

副 査 教 授 小 野 芳 彦

副 査 教 授 浦 井 康 男

学 位 論 文 題 名

日本語アスペクトの研究

－テイルの意味解釈を中心に－

1) 本論文の観点と方法

本論文は日本語のアスペクトのうち、特に「テイル」という形式の意味、用法を主たるテーマとしたものである。本稿は先行研究を逐一整理した上で、自ら収集した実例と照らし合わせて実証的に検証し、考察を行うものである

2) 本論文の内容

第一章では、先行研究のうち、主要なものを取り上げ、要点と問題点を明らかにする。先行研究において「テイル」には「動作の進行、継続」、「結果状態」、「経験、記録」のような意味があることが指摘され、近年では「結果状態」、「経験、記録」のような用法に関して「パーフェクト」という名称が与えられる場合が多いことを述べる。また、これら複数存在する意味、用法を条件付ける要因として動詞の意味分類を重視する傾向が強いことを述べる。しかしながら、先行研究における「パーフェクト」という記述、及び動詞の意味分類は、「テイル」の意味、用法の解明に一定の貢献はあったものの、実際には各用法は連続的で区分が明瞭とは言えず、例外的事例も少なくないため、特に日本語教育の観点からは必ずしも利点ばかりではないことを指摘する。第二章では、「経験、記録」と呼ばれる「テイル」の用法の側面について先行研究を吟味した上で、この用法が従来言われているよりも複雑な性質を持つ可能性を述べる。第三章では、主体動作・客体変化動詞にテイルが付加される事例について検討を行い、目的語（ヲ格）もテイルの解釈に大きな影響力を持つことを指摘する。また「準再帰動詞」という類を新たに提案する。第四章では数量詞が「テイル」の意味、用法の決定に果たす役割を分析し文脈的要因が深く関わることとヲ格の重要性を確認する。第五章では、「デ格」、「二格」とアスペクト解釈の関係を検証し、これらが通説とは異なり、解釈上の決定的な要因とは言えないことを示す。第六章では、先行研究において「動作パーフェクト」の指標と考えられることが多かった「もう」、「既に」という形式を分析し、これらが一義的に動作パーフェクトと相関するとは言えないことを明らかにする。第七章は、心理動詞「分かる」を特に取り上げ、「テイル」との関係

考察する。その結果、先行研究において、しばしば「状态的」、あるいは「人称制限的」と言われて来た特徴は、「分かる」の用法の一部分しか説明できず、実例に照らすと、「分かる」は状态的な性質と、変化的な性質を両方併せ持つ、と規定するほうがよりよく実情を示すことを明らかにする。八章では、本論文の要約と、残された課題を述べる。

3) 当該研究領域における本論文の研究成果

- (1) 「パーフェクト」という概念は研究の発展に貢献はしたが、分類基準が複雑で実際には区分が難しく、日本語教育の面からはデメリットも少なくないことを具体的に示した。
- (2) テイルには客体（目的語）の変化結果の存続と考えられる可能性のある事例もあることを実証的に明らかにし、従来の動詞分類が基準として万全なものではないことを示した。また、数量詞のふるまいもこれを支持するものであることを指摘した。
- (3) テイルの意味、用法が文脈に大きな影響を受けることを特に数量詞との関連において明らかにした。
- (4) 「デ」格と「二」格の分布が経験・記録用法と結果状態用法を区分する基準とされていたが、分類基準としては十分なものではないことを実証的に示した。
- (5) 「もう/既に」がパーフェクトの指標の一つとされるのが一般的であったが、実例を検討し、十分な分類基準とは言えないことを実証的に示した。
- (6) 「分かる」という動詞とテイルとの関係を検討し、「分かる」が状態性、動作性の二面を持つことを示し、従って動詞の意味分類が一義的なものでは必ずしもない以上、意味分類はやはりテイルの用法を一義的に決定できない面があることを明らかにした。

4) 学位授与に関する委員会の所見

「テイル」の意味、用法の問題は先行研究も多い難問の一つである。申請者が実証的に先行研究における諸機能の判定基準の問題点を明らかにしている点は大いに評価できる。問題点の指摘に大きな労力が割かれ、代案の提示においては物足りなさを感じさせる点もないではないが、日本語アスペクト研究においてやはり一定の貢献をなすものと言うことができる。当委員会は全員一致して、本論文を博士（文学）の学位授与にふさわしいものとの結論に達した。